

# 巻頭言

## ウィズコロナ時代と臨床評価

COVID-19は日常生活を一変させ、行動や経済活動の制限を余儀なくされた。治療法やワクチンの緊急開発を求める世論は、臨床試験の科学的評価やその倫理に影響を与えた。本号では、国内の臨床試験状況、米国FDAのワクチン開発・承認についての考え方、生命倫理、そして臨床開発研究自体にCOVID-19が与えたインパクトを考察する論文や解説を収載している。緊急事態下の生活から、当たり前と思っていた生活には完全には戻れないと多くの市民が感じている。ウィズコロナ時代の開始である。臨床評価についても、先人が営々と築いた基本原理や生命倫理は、この新たな時代の中、どのような影響を受け、どう変わり、どの部分が普遍的原理として残るのだろうか？

さて、明確な治療法のない感染症が流行したことで、個人だけではなく、社会全体の治療法を証拠に基づき導かなければならなくなった。パンデミックが起きれば予想されていた物語が、現実になった。個人がウイルスに感染しただけではなく、社会総体がCOVID-19に罹患したのである。感染症数理による実効再生産数の推定や積極的疫学調査によるクラスター発見は、社会に対する診断行為である。問題は社会の治療行為である。行動制限が感染や医療崩壊を抑止するのは当然だが、その治療法には副作用が生じていることを誰もが認知した。副作用を抑える政策には別の副作用が生じる可能性がある。治療効果を楽しむコミュニティと副作用の影響を受ける脆弱なコミュニティは必ずしも同一ではない。治療を要する社会全体が、一つの人体になったかのような感覚すらある。有効性や安全性に関する臨床評価学の知が、今回の社会全体の治療に有用とは言えないかもしれない。しかし、『臨床評価』誌読者の問題意識や視点から、専門分野を超えて議論を興すこと、社会を治療するために、多くの学術システムを統合して、諸課題に対処しなければならないことも明らかである。

本号では、その種の議論の端緒としての数理・疫学・医療・社会学といった文理融合のパネル討論も企画した。読者の皆様の今後の議論の契機となれば幸いである。

椿 広計  
統計数理研究所 所長  
「臨床評価」編集委員